

『風の呼ぶ声』

『かぜ』

この書を篠崎秀樹君、佐々木洋君、および森十弘師に捧ぐ。
そして何よりも故郷に捧げられる。

一章 おこり

幾万個もの卵を生む魚類の親たちは、泡のように消えて行く我が子に気もとめないように見える。蟬や蜻蛉や蝶たちは、殻を脱ぎ捨てると、振り返りもせず飛び立って行く。それはまるで多くのわたしたちのようだ。

少年の日の深い痕跡は、彼を包む春風の陽気な輝しい活発さと、弾みまわる躍動の陰に隠れてしまった。少年が何かをなくしたとしても、朗らかな日輪はその強烈な日射しの力で、彼の淀みに堅いヴェールを被せてしまった。彼はまるで明るさしか知らない少年のようだ。……

しかし少年は、それが人間だけのもつ習性のように、いつか立ち止まることを経験する。彼はそこで自分のポケットが綻びていたのに気づいた。けれども愛惜と慟哭の季節は、彼からもうとつくに過ぎ去っている。いつもの

そうだ、少年よ。君は君の友だちにも、このことを教えよ。

冷たい風を切つて、思いつ切り走つてみないか。大きく息を吸つてみないか。

君は、七つの極彩色の中で、とても珍しい紅葉^{もみじ}を、まるで宝石のように、だいじに掌に包んでいる。なんて嬉しそうな笑顔だろう。なんて得意そうな瞳をしていることか。

ただあなたはみずから慎み、またあなた自身をよく守りなさい。そして目に見たことを忘れず、生きながらえている間、それらの事をあなたの心から離してはならない。

走れ、少年よ。おもいつ切り突つ走れ。
大地をたたいて、冷たい風を切つて走れ。

何十年経^たとうが、少年よ。君はおもいつ切り走^ることを忘れてはならない。

かじかんだ冬の日の君は、うん。たしかに今にも泣きそうだけど、見よ。心は嬉しさをいっぱいではないか。

〔ページ付け「28」、「うきぎおいし」の一節カ〕

〔地名の実名は避けた方がよい？ リアル性の欠如？〕

第二章

K町〔のまわりは川が三方に縦横していて、〕地域的に閉ざされた〔場〕所に位置していた。右手に曲りくねったK川が悠悠と横たわっている。それは隣の市との境界線にもなっている。陸羽街道がそれに沿うように走っている。さらに下手の境界線はK川の垂流〔本マン〕I川、上手の一部はY川となっている。河ばかりではない。左手には千メートル級のK岳を中心にして、幕を下ろしたような山岳地帯が続いていて、他郡との明確な境を作っていた。従ってこの町の多くの村々は、河と山の間地にあたり、田畑の殆んど〔本マン〕が段状になっていた。

▽（海は遠かった。）

悟と兎の孝はまも生まれ育った。国道S号線が上手K市に入る少し手前左側に、赤い大きな鳥居がある。九月の祭り時には、これの太い柱に白い締め飾り〔本マン〕が結ばれている。①〔ここは東北だから、この地方一帯が〔冬に〕雪の多いことは当然なのだが、赤い鳥居をくぐって進んで行くと、〔K町でも〕目に見えて多くなつた。〕赤い鳥居が他の地域との境界のようであ〔だ〕つた。鳥居の中の人々が、家を出て〔何処か〕遠くへ行つて来るという場合には、この赤い鳥居をくぐって外へ出ることを意味していた。①―②〔また〕冬の厳しい寒さばかりでなく、夏は〔夏で〕堪らなく暑い。百姓たちは煤で黒くなつたよう〔本マン〕顔の額に汗を吹き上げ〔本マン〕〔ながら〕手拭いのホツ被りの上へ麦藁帽むすを乗せて〔本マン〕、田んぼの草取りに精を出す。夜は普通、玄関も窓も全て開放して、パンツひとつで寝るのが普通である。

鳥居くを入ると、そこから二・五キロの間長い一本道が続く。両側はちょうど鳥の羽のように杉林が並び、所々虫

が喰ったように家や田畑が顔を出していた。林道が突き当たると広い農場へ出る。「それは」十数農区に分れて山の麓^{ふもと}まで伸びていた「本マン」。戦時中に軍馬の飼育地として開かれてから、戦後は乳牛・鶏・豚などの家畜と果樹・野菜の栽培を中心にして来た所である。(①②が入る)

隆「本マン」は赤い鳥居の中で成長した。